



特 別  
^5  
6590  
33



八五  
6590  
33

東海林主人の書

彌生末の都の

うら

愛日臨

うら

志あ

うら



の回をうらむる  
くまのこころ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ

あはれのこころ

あはれのこころ

あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ

あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ  
あはれのこころ

物も同じ花の如く  
置い乃白舞う  
舞うとそ途の杖乃  
はさしと建名を  
其の草は花は  
借しと波の舟は

物も同じ花の如く

物化  
露石  
欽古  
璞高  
葉石

桐

貫之と之紀の海  
白くはこれ風  
心の  
園庵先師の梅  
物も昔の  
さうゆり  
後水と松

松二

慈父の心は

潮のつらさを知るは乃の如く

里柳

雨のつらさを知るは乃の如く

翠江

流石の末の目撃こそ人様と  
乃雲の如くは 瑞穂を  
とちかひぬるは乃の如く

道へ乃道へ 慈父の心は

春雨

西風へ 乃の心は

貫之

月影の如くは乃の如く

月沙

赤土の如くは乃の如く

雲石

師の如くは乃の如く

如女

魚の如くは乃の如く

海素

漲る如くは乃の如く

松二

大なる小なるをり

里心

高目に見送るは姉の歌

飯后

廊の車向流るるは

環高

おのゝこゝの飛ぶ鳥の如く

清菊

田を捲つる馬は糖物

柳花

乙女の世にまゝに介はるる

三巴

入流の流るる水

飲音

後者の異名を流るる水

追くもるる蟻乃り道に

菊の如き運り同るる如

焚出れ侍り飯のより後

刀自の端をまじりて流るる月

こころの如き流るる水

と目出ぬ簾を感へりて流るる

夕陽のこぼれ影をさしけり

そよ風をふかすの如く

高き此の山に

古鐘なり

送別名録あり

奈も多き心は

笑すも奈も多し

秋

月海

城西

酒素

遊りて杖の進も

波英

長きも川に

如柳

多き心は  
杖の進も  
川に  
遊りて  
長きも

生かす柳に

三回

松二貫之  
貴之  
松二  
女界  
清蕭  
案石  
日一其  
あさ  
ひ  
日  
日

針のさしに刀磨は舞  
又さかんと飛く如き  
下坂まて自ひとゆる  
右果つて海へさす  
船便り待ちておののこ  
旅一別  
風呂ふきと着るん  
名色の紙

貫之  
松二  
女界  
清蕭  
案石



年ふと一は梅と一均

六日か数日か...の口

悟るの角の...流中

是れ...の...の...の...

...の...の...

に...の...の...

九十九の年...の...

志す杖の進み...の...

...の...の...

右...の...

...の...

...の...の...の...

...の...の...の...

貫三

三因

前...

耕の中もほほ

松二

好む中もほほ

之系

鏡川

若館 一 河津

松二

清和のめら

貫之

海生亦回る志丘之痛る龍物之のき飯と物と

守りしは

松二

送別

秋

川春代 徳也

龍物

美濃色江

鶴仙

白木

川

貫之

波

松二

六流

はらうのうたはしつるまの、一母界  
貫三  
ハ流のうたはのまは流のま  
如二

新家の流

貝のまねる松はしりまは  
貫三

何はらうあまの浦はのまはしつるまの、一母界  
はらうのうたはしつるまの、一母界

ゆらうのうたはしつるまの、一母界  
貫三

寺の石のむ。しつるまの、一母界  
如二

何はらうあまの浦はのまはしつるまの、一母界

そまのうたはしつるまの、一母界  
樂之

因も流へは流のまはしつるまの、一母界  
貫三

流もあまの浦はのまはしつるまの、一母界  
如二

あまの浦はのまはしつるまの、一母界  
赤里

あまの浦はのまはしつるまの、一母界  
花流

あ——化縁は銀たぶら  
玲——沙汰の法華も遠く

よ——うらなひ——漏——

閑——ひつひの夕暮の

ま——い——るあ母の

美——ま——と笑——る

娘の——つづ——る

何——う——か——物——

あ——あ——あ——あ——

あ——あ——あ——あ——

あ——あ——あ——あ——

あ——あ——あ——あ——

あ——あ——あ——あ——

あ——あ——あ——あ——

白くはるかに流るる  
水は花の影をなす  
さびし  
さびし  
さびし  
白くはるかに流るる  
水は花の影をなす  
さびし  
さびし  
さびし

名経あり

探題

湖遊  
樂之  
花浅  
貴之  
赤里  
松二  
雪の体はひるや  
舞の影はまはる  
秋の風はさびし  
白くはるかに流るる  
水は花の影をなす  
さびし  
さびし  
さびし

白くはるかに流るる

湖遊  
樂之  
花浅  
貴之  
赤里  
松二

松の葉とて... 如家... 一... 一...

貫之

立身... 乃... 一... 一...

一

十... 古... 池... 如... 水... 乃...

志之

淡... 舟... 乃... 一... 一...

松二

解... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

謀... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

龍... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

之... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

右八分表

目... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

松二

幾... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

樂之

更在

乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

貫之

詠... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

松二

伊呂波の歌の識

衣之瀧と深

貫之

葉とふまを

松二

神筆

夜ふきも新樹

貫之

夜宿しつゝあ

松二

外日之龍活

青海

貫之

とみまを

松二

白く最神寺

名一著

貫之

ふこと

松二

あま

山

連筆

川深

あまのこゝろのなごころ

貫之

あまのこゝろのなごころ

蓮華

あまのこゝろのなごころ

松二

あまのこゝろのなごころ

一止

あまのこゝろのなごころ

あまのこゝろのなごころ

貫之

あまのこゝろのなごころ

松二

あまのこゝろの

あまのこゝろのなごころ

貫之

あまのこゝろのなごころ

あまのこゝろのなごころ

旭戸

あまのこゝろのなごころ

松二

あまのこゝろのなごころ

あまのこゝろのなごころ



つる香の——つむかのふ  
清遷望と所の目見と福の  
——あそこ——深る軒、  
銀屏——六玉川の秋の風  
位もさしと立——軍配  
まきあけの事目の後のうさ  
——の乾細ふまけ——

積るこころを海つむおのち  
あもあも——あもあも——浪  
業あはれあはれを海を沸か  
ゆきあふ——あもあも——  
うさつ——あもあも——  
情あふれあふれ——あもあも——  
あもあも——あもあも——

探題

ねのきりーほらひあそぶら

旭戸

美家の後ー又し出生屋敷

松二

等の記ーし探題の時

貫三

接写

海ーあや花家のちんこ

松二

友切の条ー(探題)の

旭戸

送別ーあや花家の

旭戸

拾ひあふふの条ー梅の家

涼ー美の道乃いもの

松二

石のともけみづの輝し

貫三

右之物

田の道ヶ残のりし時

卯の條ーし流し流し流し

松二

甲浦之先寺精舎——  
おし山其ふ之志おと又ありし  
このは中をた——  
具あり、たしとあ——  
おひこ、さあおひこ、たふも、  
知こと人のおあちらひい——

おち

其井

い——  
おの——  
おの——  
おの——

貫

松

い——  
おの——  
おの——  
おの——

之志

おの——  
おの——  
おの——  
おの——

其川

おの——  
おの——  
おの——  
おの——

其ふ

おの——  
おの——  
おの——  
おの——

おの——  
おの——  
おの——  
おの——

おの——  
おの——  
おの——  
おの——

おの——  
おの——  
おの——  
おの——

おの——

流の西に

唐の府

右短歌

探題

花の

花の

花の

其井

三因

松二

花の

花の

其川

貫之

通題

花の

花の

花の

花の

其川

松二

貫之

二遠

松の葉の香

松の葉の香を採りて

松二

松の葉の香を採りて

其井

松の葉の香を採りて

之因

松の葉の香を採りて

其二

松の葉の香を採りて

其川

松の葉の香を採りて

其水

松の葉の香を採りて

松の葉の香を採りて

松の葉の香を採りて

松の葉の香を採りて

松の葉の香を採りて

松の葉の香を採りて

松の葉の香を採りて



筆一何一松の葉

一本の葉の匂う目乃乃

〜の〜の〜の〜の〜

目乃乃の〜の〜の〜の〜

〜の〜の〜の〜の〜

〜の〜の〜の〜の〜

〜の〜の〜の〜の〜

〜の〜の〜の〜の〜

〜の〜の〜の〜の〜

大松何

探題

筆乃乃の〜の〜の〜の〜

〜の〜の〜の〜の〜

〜の〜の〜の〜の〜

具井

三周

松二

関——の——の——  
涼——の——  
津——の——

具冬

具山

具冬

通題 横津

横津のわが——の  
夏あつても夏の横津のそよ草  
波——の——  
横津の横場

之因

貫之

具冬

横津のわが——の——  
横津のそよ草のそよ草

具山

具井

横津のわが——の——  
横津のそよ草

松二

横津前書

具山

七まつりの道の——  
横津のそよ草

松二

おろし——  
横津のそよ草

横津のそよ草のそよ草  
横津のそよ草



山果のなる如く山にありては

其年

山にありては山にありては

松二

流るる水は山にありては

之園

山にありては山にありては

貫之

村の山にありては山にありては

其川

山にありては山にありては

子

女六の巻

探歌

小瀬の山にありては山にありては

之泉

飛石と滴る水は山にありては

其川

山にありては山にありては

松二

山にありては山にありては

貫之

山にありては山にありては

山にありては山にありては

貫之

園のきの標記は——桐の皮 松二

完治堂の好ま体法あり——白波の心  
只をひくくのも——(松二)

松二

鶴のけいふをいふて菓と名

菓と名をいふての羽をい 宇林

津川梅後をいふてけいふをいふ

母二

七つひくく園の——松の皮をいふ

いふは——その道は源—— 其凡

穀類純まとも体あり日のあるをい 大里 其遠

鶴のけいふの明者—— 松二

いふ園の標記は—— 其産

鶴——を源は結ぶは其 其撞

鶴の皮をいふては—— 其

まひくくは—— 三

人さあめは来のよはる—とて  
古き世にゆく時、感—  
其道のよはる海をたはるは  
耕—凡の畜ともいふ  
右短歌なり—  
—席の標題—  
—海をたはるのよはる—

還 輝 二 雀 貫三

とて如せん海をたはるは  
海をたはる—とて如せん  
柳の風をたはる—とて如せん  
松の風をたはる—とて如せん  
松の風をたはる—とて如せん  
松の風をたはる—とて如せん

其園 其園 其園 其園 其園 其園

途は道は夕の花の月の夜

其園

涼——六曲のこころのまはる

貫三

○

美柳の枝をよめるこころの別

甚月

端の駒——鞭とふはれ

貫三

○

夜更のあ——あつた旅のま

其輝

一帯を渡るま——おの系

松二

○

君の幾そふあつた——お島

松二

海もともく夏のおま

甚月

白くく濃島海麻少春園君を詠

松二

あつたのあつたあつた

道——あつたあつたあつた

夢花

○

世に聞かざるは人の言の響きを

貫之

回一學ひも道の端一

夢花

水止も清くも濁るも一合

朝々

新一善信出まらざる

任茂

目の如きも心も一

舎柳

目も心も一草の心も

為志

能く一深むる降つて

孤松

仕女も塵埃の心も

松二

第う一い奉公一

急

舟の便り一

柳

朝一の心も

茂

海一も心も

為

日影も気も

之

心も

志

海探るる事なりしと傳ふる事  
積るる事なりしと傳ふる事  
逢ふ事なりしと傳ふる事  
事なりしと傳ふる事  
事なりしと傳ふる事  
事なりしと傳ふる事  
事なりしと傳ふる事

意 之 仰 為 二 義

道の事なりしと傳ふる事  
事なりしと傳ふる事  
事なりしと傳ふる事

為 意 子

古經義  
帝上探題

水と雲の境の事なりしと傳ふる事  
事なりしと傳ふる事  
事なりしと傳ふる事

志 貴 正



おのゝまゝ——志母を目とて思ふ  
とこのとらへるのまゝに女おゝの浦  
はやり根来寺——宿と雖もふ親の  
奇蹟をこそ仰せ

### 筆と鎧のいゝまゝ根来山

足利村鏡八幡をいふ——別評所ハ  
一附の浦このホ——鏡をいふまゝの  
鱗のまゝ——驚かすいふまゝの鏡をいふまゝ

いふまゝのいふまゝのいふまゝ

日十のまゝのいふまゝのいふまゝ  
いふまゝのいふまゝのいふまゝ

いふまゝのいふまゝのいふまゝ

いふまゝのいふまゝのいふまゝ

いふまゝのいふまゝのいふまゝ

いふまゝのいふまゝのいふまゝ

貫三



回春のう大峰山

ふよな涼

想

回春のう大峰山

涼のう大峰山

ふよな涼

回春のう大峰山

金堂の想

回春のう大峰山  
涼のう大峰山  
ふよな涼

ふよな涼

回春のう大峰山  
涼のう大峰山  
ふよな涼

ふよな涼

回春のう大峰山

~~~~~

梅子花舞子~~~~~

春日朝の波~~~~~

松並の葉也~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

藤柳如也~~~~~

~~~~~

神垣~~~~~

照~~~~~

~~~~~

増~~~~~

~~~~~

~~~~~

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに



お原

多川如日原のそらちあう

口ろく多川 静景主人を訪

ちりるにらまを都の時を

灯しをしくそ月入る妙を

甲勝金剛院しそ身り

飛とり一葉し一葉の音を

飛り

雲吹

ちりるにらまを都の時を

雲吹

法水の鏡は雪はたけを

丸如

かきしるにらまを都の時を

不由

楸し葉皆有るまを都の時を

楸重

瓶の出入をまを都の時を

貫之

ちりるにらまを都の時を

松二

ちりるにらまを都の時を

吃

大粒の石をよそへて

降す

庭の底へ流す山

石

流す、迷おとせしむる

石

流す、流す、流す

石

流す、流す、流す

石

水——ひたす所の石

石

水——ひたす所の石

石

石の底へ流す

石

流す、流す、流す

石

流す、流す、流す

石

流す、流す、流す

石

人、流す、流す

石

再建の流す、流す

石

水——水晶の石

石

空のしちをー埃の向山

遊ひもつとーぬ膝高の友

古経歌

之阿書にりりり

床のしちをー埃の向山

第一のぬ法結の産物とけ君

真門実かまの河法と後しと

由

ま

冊二

雲風

ねこ

酒の海の心は日の時

子嗣

君見しとゆとー人はいし使は

ぬぬ

かまのぬ法結の産物とけ君

雲風

真門実かまの河法と後しと

ねこ

酒の海

子嗣

かまのぬ法結

君見しとゆとー人はいし使は

かまのぬ法結

之新のりたる多き事ありては

ねこ

口ナリ事ナシト云フ

之丹幸如のていふ法に

幸崎の月を

義仲寺を御堂に法皇御  
書に類あり御西に  
のりて御白物軍の墳墓に  
傍に兼平公の松あり

此寺の塚を玉を

一葉津

まを

る

の

口

枝



ふじの葉りしむるきしりてハ端ま  
ありうらうらと知位庵の四流法あり  
此しやまきりて位の形をひき  
そまわつて中のみんをさる

分此しむるまのしりてや梅の花

甲州津島からしり

な科如ちかきしりては焼る餅

口すちの餅をい

いさつしりてまの如く庵の雨桂

いせの如くまのしりてまの梅のしりて

業下梅しりて梅のしりて中をい

口すちの神しりて

若きしりてふの源しりてお十餘

甲すの如くしりてのしりての如くしりて  
海をいさる葉のしりての如くしりて  
いさるしりて富士宮のしりてしりて  
かきしりて

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

ハ

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

ハ

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎

山崎のてんてんてんてんてんてんてん

山崎

いんげん草の葉を煮た汁

雨柳

待甲斐のりして海苔を煮た汁

吉崎

甘藷の葉を煮た汁

調園

新玉の葉を煮た汁

少按

浴の葉を煮た汁

巨智

新玉の葉を煮た汁

雲乙

赤玉の葉を煮た汁

赤玉

赤玉の葉を煮た汁

赤玉

赤玉の葉を煮た汁

赤玉

赤玉の葉を煮た汁

赤玉

赤玉の葉を煮た汁

赤玉

赤玉の葉を煮た汁

赤玉

赤玉の葉を煮た汁

赤玉

赤玉の葉を煮た汁

赤玉



おとこ〜〜〜〜〜の者ゝ  
三

ま〜〜〜〜〜の  
二

ま〜〜〜〜〜の  
柳

ま〜〜〜〜〜の  
之

ま〜〜〜〜〜の  
子

大弘河

席の標題

名の歌〜〜〜〜〜  
徐河為

名〜〜〜〜〜  
吉味

目〜〜〜〜〜  
巨智

輝〜〜〜〜〜  
臺川

美〜〜〜〜〜  
白作

ま〜〜〜〜〜  
貫之

ま〜〜〜〜〜  
李休

お目も如くはな都の世業の  
まぶしきまぶしきまぶしきまぶしき

ねこ  
潤也

同きの福島

歌心行

一生清伊那

梅二

可なりと吹入るて風の音も

響くまの葉の深きま根

朝和

小原原の音ちよ日のまき

と  
為雄

綱と馬の影を

定松

調志

松松縁と水の音物

支麻

耳ぬ人泣き決ま

魯高

宋の宮へ

梅栄

柳の菊菊一葉葉の大漢

堂二

老うま一橋の音と郎

貫之

国々々の歌一陽と

小研

リ燈のふりて花をよそらへて

芦角

きりぎりすのこゝろにやうとむ

文角

達翁の昔法——つ川亦子の法

如秀

いけいけとてん 流りての行

梅

見所の一日ロニテりきりしあまの初流

又

あまのそりみのあまのしゆ

之

村して流せ流るともまゝに流

娘

おま——柳独活はくの味所

麻

ふらり〜西を定りの流り城

研

おまをさ清く空深く照

梅

引きと競ふお馬の心懸下

秀

あまのこゝろにやうとむ

松

握りしは縄の煙る寄のこ

角

瘡如の鬼、夏をよれあま

地

うらまのむらさき湯津の金のしらべ  
 野をふも人乃あつゝな  
 野狐を嵐の雲下 初課也  
 夢より夢とて板下野の雲  
 空の月を雲の影とて美  
 高き一葉はつゝ海まの霧人  
 森つゝまの霧の影とて美 処女よ  
 梅 之 竹 菊 如 白

了——梅まの——海の影とて  
 空の月を雲の影とて美  
 二七位乃とて一葉はつゝ  
 美まのむらさき——雲下野の雲  
 友 酒 坊 —— 未 永 乃 夢  
 空の月を雲の影とて美  
 夕暮の雲の影とて美  
 湖邊也



手板のつゝいゝあまの月  
 紫の衣をいゝあまの衣  
 目り初るいゝあまの衣  
 けろくあまの衣  
 せいのあまの衣  
 けろくあまの衣  
 高白あまの衣

若角  
 貫之  
 松二  
 若角  
 若角  
 若角  
 若角

杉汁やあまの衣  
 少の陣法  
 糸金  
 若木  
 全部

の所  
 梅深  
 小島  
 夫麻  
 梅二

同日酒園師の  
 先と信り

松二  
 松二

蝸牛の足跡をみる夕月

調志か

此名目つて世にあらざるきり  
世々先師の  
遺碑をこ拜し

海へ——流ゆる美草の春 塚の所

ねこ

梧桐を  
歳を 七曜をいかりし 梧桐の  
河を六の井のまゝとて 夢と人  
東流し——なむむるこを別あはらうと

昔も

ねて寝し身も海の前はさ

早くと流る水と待りた

ねこ

夢をこの宿まき宿——  
うめしお交りしこを宿つこまのな宿  
ねこ ねまの祇園を  
うめしお交りしこを宿つこまのな宿

調志か

こ魚島——足送るまを西東

又の日暮る中——暮るは

ねこ

新清を神のあいの海へむ

ねこ

ねこ

不保の園をこりし ねこ

ふ船を返り——見せぬ音のみを聞  
ねえ

目覚醒弁を聞かす

龍渡の肥と醒木の法を弁

日よけ見よと大板を十餘重の  
西と遠くはす

翅得——心深——や下りぬ

難波

帆を——のるし——あてぬの日

唄は——

津風のききしとらとこの空

日よけ屋敷の暁所完戸たうし補とさる人の宿り  
回し板——

洋や——の籠るる

日ぬお川日ぬいて日向のふ平川何事  
武若は行とら月とつ波のえ一宮先主

和  
おかし

を訪ふものなきはつゝの日の日(白)さる

牛馬のふしはしるる

はは小島島ふしを付杉原より

さめししてけしきも— 夏松葉

四季甲申浦那知の松舎— 再宿

上人清うけのふちりりりり

社多ふららるるぬはよこ— 具井

先ゆららけと目の路石 ねこ

。

不易らるるひのるるお那知のなの日

四季の舟舟らるる松葉

せしりりりりりりりりりり

結仙

待た— 美らまらるる月のは

清くも聞し目の涼— ねこ

毎  
日  
の  
心  
を  
静  
め  
て  
い  
ら  
せ  
て  
く  
だ  
さ  
い  
と  
い  
ふ  
こ  
と  
は  
い  
か  
に  
重  
要  
な  
こ  
と  
な  
ら  
ん  
と  
思  
ひ  
ま  
す  
。

一  
切  
の  
事  
を  
心  
を  
静  
め  
て  
い  
ら  
せ  
て  
く  
だ  
さ  
い  
と  
い  
ふ  
こ  
と  
は  
い  
か  
に  
重  
要  
な  
こ  
と  
な  
ら  
ん  
と  
思  
ひ  
ま  
す  
。





らんまゝいさひ  
川の涼い物いりて  
湖の産涼の江いさか  
紀の海いさかいさか  
海いさか海いさか  
海いさか海いさか  
海いさか海いさか  
海いさか海いさか

日さすはげしき  
身は草いさか  
日中のとと  
流るいさか

風  
たさか



于齋天保二卯初秋





